



情報技術でオープン化する教育

白井 克彦

(早稲田大学)

shirai@shirai.info.waseda.ac.jp

先日、久しぶりにある企業の中央研究所を訪問した。この研究所には、私の研究室の卒業生も働いているが、昔から同じ研究者仲間も多く、若い頃は定期的に勉強会を開いたりしていたので大変懐かしい研究所である。3Dのディスプレイや個人認証などいくつかの最近の研究成果を見学させていただいた。それも面白かったのであるが、その時ふと40年前に私が学部4年生の時に1カ月ほど、この研究所で実習をやらせてもらったことを思い出し、大変感慨深かったのである。このことをここに記す理由は、この時の実習の面倒を見てくれた研究室は、当時話題を呼んでいた固体回路の研究を始めていた部屋であったからである。その時見せていただいた回路は、今日の集積回路のイメージではなく、機能部品の小型パッケージのようなものであった。あまり革命的とは見えなかったが、その後の集積回路技術の発展はどうだろう。あれから40年、パソコンとネットワークは新しい社会構造を生み、映像や音のデジタル化は、その取り扱いを根本的に変えつつある。

さて、ここで書きたいのは、情報技術の昨今の教育へのかかわりである。早稲田大学における教育全般に対する情報化の歴史を見てみると、第1期が1997年から1999年であって、PCがまだ高価であったがネットワーク利用とともに全学生に利用が普及した時期である。ワープロ、メールとインターネットの利用は学生間はもとより教師と学生のコミュニケーションのやり方を大いに変えた。クラスに参加する学生や教師のBBSによる討論は教室外でも盛んになっている。また、インターネットを介してある程度の専門的知識まで容易に得られるようになってきたし、膨大なデータの中から必要なものを要領よく抽出する手段も得られつつある。また、理工系のみならず文系でも、判例データベースは言うにおよば

ず、統計データやさまざまな1次データベースを用いたり、教育用や業務用のソフトウェアパッケージを利用して教育研究を行うことが急速に増してきた。全学組織として、メディアネットワークセンターが全学生を対象とする情報リテラシー教育を進め、ITセンターが教員に対する広汎なITサポートを行うことで、その内容が深められてきた。こうなってくると、レポートを課す教員側も問題の出し方に工夫が必要になってきた。学生自身に調べさせたり、考えさせる課題を出すことが要求されている。いずれにしても、現在は、大多数の学生が日常的にPCを使いネットワークを利用している。

第2のフェーズ(2000～2002)の大きな動きは、大学の情報化をきっかけとする大学のオープン化である。学部の垣根を取りはらったオープン教育センターは1,000科目以上を提供するようになったが、ここではWebベースの講義や教材を通常クラスと併用するような新しい試みがたくさん生まれている。とりわけ語学教育は以前と大きく変化しており、米国、オーストラリア、中国などを結んだトレーニングが本格化している。これらのITを利用した授業には遠隔教育センターがWebベースの科目の製作とインターネットによるテレビ会議方式の授業やゼミの実行を支援している。また、昨年からは人間科学部に通信教育課程が開講し、Webベースで全科目をオープンする本格的なe-Learningが始まった。教師と学生達の間本当に24時間メールが飛び交う様を見ると、対面授業とはまた異なる教育のやり方があることを実感する。

もう1つは、大学間での授業の開放である。いわゆる単位互換は国内外の大学間でますます盛んになりつつあるが、複数の大学がコンソーシアムを組んで、互いに特色のある講義をネットワーク経由で提供し合うことは学生の移動を必要としないので容易である。早稲田大学の情報化推進第3フェーズ(2003～2005)では国内外の大学がCUC(サイバーユニバーシティコンソーシアム)を形成して、協力することを目指している。この特徴は大学だけで進めるVU(バーチャルユニバーシティ)ではなく、多数の企業も参加してNPOとして活動しようとしている点である。米国においては、VUがかなり昔から盛んである。確かに、実務教育などスキルアップや知識体系を効率よく修得するためには有効であるし、時空を問わないという意味では、国際間で上質の教育プログラム開発の競争が始まっていると言える。しかし、このような国や地域を越えて多様な教育プログラムが提供されるようになったことは、言語の問題は依然大きいものの、いずれ21世紀の地球市民というものを生み出していく、1つの大きな契機となっていく予感がする。

(平成16年3月31日受付)